



續君羊書一覽

二

4加2
765
2



門 4 3
雜
卷

雜史之部

續羣書一覽

丑

印

雜史之部

陸奥話記

四冊

寛文元年陽月向陽子林春齋序跋

此編初卷は奥羽軍記にして前九年合戦を録す

寛文二年孟夏日端亭子了的之跋あり末三卷は

後三年軍記画卷物之寫也此書巻端に貞和三年

法印權大僧都玄慧之序有之

新安手簡曰奥後三年の繪巻物之詞書に將軍

圖解を奉て申様武衛家衛か謀反すてに貞任

宗任に過たり私の力を以たまゝ相平つる

事を得たり早々追討の官符を賜りて首を京へ奉ふ人とする然共私の敵たる由に聞ゆ官符を賜せは勸賞行はるへしよりて官符なるへかふさる由定め右の如くに見へ候はし扱卷首を脱し候事にて此戦ひいかなる事に起り候歎いまた造成所見無之候云々
此上卷は土御門文殿寄人仲直筆中卷持明院左少将保脩筆下卷世尊寺從三位行忠筆各写其詞圖則飛彈守惟久也春齋か跋曰此記詞簡古而出平家物語惜哉卷首を闕此原本于今華族池田家

(第壹號)

に傳來す奥書に曰

後三年軍記書画三卷者播磨宰相輝政卿北之

方御稱女子良正院神君之之所持而彼家希世之珍

藏也玄孫右衛門督吉明朝臣恐其久而敗壞也

今茲元祿十四年辛巳冬十月就京師而修補焉

有故許供天覽聖感不少寔可謂希世之勝宝

矣修補功成請干余欲録其事以遺後裔余不獲

辞遂書以贈之

元祿十四年冬十月下旬

特進藤原基時記

古書集序

此奥書刊本には無之寛文二年孟夏之上梓也

一 参考保元物語

九冊

今井弘濟將興考訂内藤著軒貞顯重校

保元物語者不知何人所著醍醐報恩院所藏舊記

云葉室時長作大外記中原師香所手書上保元物

語狀云故師梁所鈔師香乃師梁子也今探世族名

家之藏得異本五部章段編次互有異同體製不齊

然則撰者亦非一人明矣異本併印本凡六部各參

考校定折衷諸實錄集為一書以便覽閱所謂異本

五部者

(第壹號)

一 京師本 得之于京師因稱之此本人名諱多

用假字無由證文字因唯取訓參考

耳

一 杉原本 九條殿家司杉原出雲守平盛安家

藏也

一 鎌倉本 問注所上野介三善康豊手書而鎌

倉相承院所藏也第二卷闕之

一 半井本 半井通仙院和氣瑞榮世々藏本也

一 岡崎本 岡崎内記所手書也

凡書中援古徒資文華者異邦故事悉除之其引用

之書通計四十九部也九例之大意舉之内藤貞顯之跋

一 参考平治物語 六冊

前書と同じ引用書は通計三十九部なり

此兩部者嚮水戸光圀卿命今井弘濟校讎盛衰記

太平記諸本并存異同旁搜群書以為脩史之助弘

濟未終功而歿再命貞顯重校焉元禄六年十一月

上梓

一 参考太平記 四十冊

此編も今井弘濟内藤貞顯水戸光圀卿之命に依

(第壹號)

て校定寸書體参考保元平治物語に同じ考訂寸

る處之異本は西源院本毛利家本金勝院本今川

家本北条家本南都本島津家本今出川家本天正

本等之九種也参考之書は皇年代略記増鏡公卿

補任紹運録東鏡歷代皇紀將軍執權次第神明鏡

北條家譜舟木系圖東寺執行日記其餘數十部大

り

一 太平記演義 五冊

岡島援之王成編

享保己亥秋八月守山祐弘漢字叙

古書保存會

此編は太平記の通俗文を下段に置き上段には
元之羅貫中か三國志忠義水滸傳等之演義に效
ひ譯する處にして無盡之語譏言雅俗共賞して炳
々然たり享保己亥先梓三十回を則足利尊氏平
家に叛く條に了續梓の篇を見す

一 筑紫之卷

写

三冊

此書は延元三年之秋南帝皇子懷良親王吾妻へ
御下向の時伊勢の海より御出船遠江洋にて御
難風に逢ひ給ひ辛ふして薩廣の坊之津へ御漂
着ありしを島津上総入道我館へ入參させし上

(第壹號)

肥後の菊池武重の許へ知ふせけるに武重悦ひ
迎ひ奉りて征西將軍と仰き奉りて九州の大小
名を打靡き少貳大友等と数度戦ひ武重之子武
士遁世武光十男にして其家を継ぎ武威先代に
越へ其子武政又弓馬之藝に勝れ武朝武義等探
題尾張今川を打破り大明國と和合の船絶へす
通し文中年間まで九國の闘戦を委しく假名書
にせり太平記の抜萃に少しく文を加へたるも
のゝ如くに見ゆ一説に偽書也と云云

一 中興鑑言

一冊

古書保存會

平安三宅緝明著

此編は元弘中興の論鈔にして所謂論勢論

義正興復統論徳修身治家勤政夙行軍置防騎奢

士木聚歛等也自跋有之

一 南朝紀傳 写 四冊

此書一名南方紀傳と云群書一覽曰自元弘元年

至應永三十四年迄之事を載すと兼文見る處は

下卷正長元年正月より長録禄二年八月廿七日赤

松之殘黨石見中村等宮二方を弑し神璽を奪ふ

て北帝に献り主家を再興するに至る應永三十

(第壹號)

四年は三卷之終り也蓋し尾崎氏の擧る處は欠

本なるべし此書卷首南朝の系譜誤り多し又宗

尊親王宇津峯宮を一主兩号とし宗良親王は信

州に戦ひ一品宮は常陸に菴城と一親王を二人

と為す如き事多し證を成し難く或云偽書なり

と櫻雲記梅松論を合して南朝三部之書と稱す

異本も又二三種あり

一 浪合記 写 一冊

此編は應永四年世良田大炊介政義桃井右京亮

宗綱と議して宗良親王の御子一品兵部卿兼征

古書保存會

夷將軍尹良親王を吉野より遠江國に奉迎ふ人
と桃井和泉守貞職を以て上野國へ奉移新田の
四家吉野の十一黨供奉して遂に駿河國宇都野
に移し田貫治郎か館に奉入井伊介天野民部少
輔遠幹鈴木越後守井出彈正少弼等与力才同五
年鎌倉勢鈴木か居城丸山へ迫る尹良王此所に
御座あるを以て也鎌倉勢上杉三郎重方敗軍し
て引同八月尹良王甲州武田信長の許より上野
寺尾城に奉移同十九年四月廿日上杉憲定兵を
寺尾に發し世良田政親を攻政親長樂寺に入て

(第壹號)

自殺し二郎三郎親氏は遁る同六月七日新田相
摸守義則為木賀彦六左衛門秀澄入道於相州底
倉討死し同廿三年八月上杉禪秀乱之節桃井宗
細禪秀に加里江戸遠江守を此遠江守は義興を
國清寺にて打取武藏國矢口村の川端に梟首す
同世一年新田小三郎義一世良田政義同親秀桃
井宗細大江田安房守羽川安藝守等尹良王を供
奉して同四月七日信州諏訪住人千野六郎頼憲
か島崎城に奉入同八月三河國に移座此時尹良
親王の詠に

古書保存會

さすふへの身にしありなは住も果るとまり
定めぬりき旅の空

同十五日於飯田越杖突坂野武士等之襲来し大
河原にて尹良王及桃井宗綱世良田次郎義秋羽
川景庸同景國等廿五人自殺す尹良親王の御子
良王を供奉し世良田政義桃井伊豆守貞綱等尾
州より三州へ越んと永享七年十二月二日不意
に飯田太郎駒場小次郎か一族に出逢ひ合戦に
及び貞綱并加治賢物野田彦治郎以下自殺同三
日政義等又自殺し良王は漸三河國鳴瀨村に遁

(第壹號)

る明應元年三月五日良王七十八才にて卒去此
二王の御事を委しく記せり奥に洞院大納言の
事松平泰親の事津島祠祭祀由來之事大橋家の
傳等を附記す
奥書

長享二年 戊申 九月十八日

右浪合記一卷崇巖院羽林公藏書也拜閱之
際乞以謄写之備家乘肯 佐野山陰校

一 南山巡狩録 写 廿二冊

大草大次郎公湖撰

古書保存會

文化^六年秋八月漢字自叙次に引用書二百十四部九例

此編は延元元年八月十五日に筆を起し元中九年壬十月に終る南帝三世總て五十七年間の事蹟を記す卷一御系圖卷二より十五に至り本記卷十六は附録として明德四年より長祿二年に及ひ其間六十七年三帝の諸皇子の御事跡を詳に寸追加五卷は本文に採用する古文書を集め遺草三卷は和哥の集撰也御系圖は天野信景竹口榮齋の説を取事多く且足利治乱記多氣榮窓

(第壹號)

後太平記南木武経南朝太平記恩地圃書南朝補任同武臣傳櫻木物語筑紫卷吉野の卷等は偽作としき除き武家高名記武家評林等の俗書は素より用ひす南朝の事蹟に於ける盡せりといふべし文義も又優美なり

一 南狩遺文 六冊

紀伊山中信古纂輯

明治三年庚午冬閏十月倉田績序

此書南朝自延元年中至元中に迄帝王四代之詔書論旨武將の下知状等を集むと雖京都府下各

寺に存在する之古文書等の類は十之一ニ載せ
ざるは遺憾也追加あり度卷之六は公卿表にし
て古記録の抄出也此編活字板を以て摺本とな
す

一 保曆間記

三冊

卷首無名氏漢文之序あり
此記は保元平治兵亂の起りの事より安徳天皇
西國に落給ふ事迄を上卷とし平家没落の事よ
り承久亂起る事迄を中卷とし後堀河院踐祚の
事より後醍醐天皇崩御の事までを下卷とす後

(第壹號)

白川院保元年中より光明院の曆應年中に至る
其間百八十四年の事を記するを以て保曆間記
と号せり

一 室所殿日記

写

廿五冊

石堂民部少輔重益編

此編は曆應元年五月より筆を起し應安五年八
月に終る偽作の説ある書なりと雖も外記録に
不載事柄頗る多し又南朝の史には其必ず補ふ
處不少捨用は識者之眼にあるべし兼文花山院
家の藏書を見る左の奥書あり

室町殿日記全部廿五卷以全本之部考之及校
 合右者以桃井刑部少輔直安之家本与菅原長
 雅之家本写合之畢尤菅中之実録也
 大永六年二月下旬
 藤原雅綱 花押
 右之日記者為菅中之実録写之畢
 元和元年四月下旬權大納言藤原永慶判
 一 鎌倉大草紙 写 七冊
 卷首に真字序あり序中の文に云本朝称記録者
 不為不多就中此記者尊氏末記之遺書而関東大
 家之舊記也云云

(第壹號)

卷一 永和五年三月三日改元康暦元年に移る美
 濃國土岐大膳大夫退治として上杉憲方入道京
 都出勢の事より應永十九年に至る卷二應永廿
 二年より同卅三年に至る此書中に小栗照姫十
 人之良從之事の实録を載す卷三永享より嘉吉
 に至る卷四宝徳二年之事卷五寛正十年享徳三
 年四年の事卷六康正元年二年長祿元年の事此
 書中東下野守常縁齊藤入道怠念に山田の庄を
 押領せられた後述懐十首の哥をよみて彼庄を
 もとの如く返し遺しける時の贈答の哥の事共

つまひふかに載たり卷七文明三年同十一年の
事此中に太田道灌の事を記す

一 舊長祿記

写 一冊

此書奥州の民家より出し趣にて卷尾破損誤字
又多し雖然其新撰長祿記とは大に相違の条々
あり遊佐河内守國助之業平物語の中に雪の精
と通し或は生涯契給ふ女人之数は三千三百三
十三人也と記す妄説あり長祿四年九月十八
日畠山義就京都没落より同政長管領に任し同
六年將軍家花見物河原猿樂興行迄其間五ヶ年

(第壹號)

の記事方札共委く畠山一家之進退のみを記載
す

奥書

文明十四年中春下旬之比如本写之了

河州若任寺 右筆主祐全

裏書あり其卷端に曰

今年元弘八月九日改元同月大外記之注進関

東之處有改元詔書無改元記仍関東不用新曆

用元徳曆云云又関東号元徳四年今年元弘九

月廿二日改元為正慶元年これに依て見札は

於關東元弘之年号不用と覺ゆ

但此裏書は自元弘元年至曆應三年十箇年間の

戰略記事にして長祿記は裏書より後のものなり

一 嘉吉記 一冊

此記は嘉吉元年六月廿四日赤松満祐教祐等將

軍義教公を~~殺~~し領國に退去す同七月細川成之

山名持豊赤松貞村武田信繁等兵を争ひて播磨

に入り持豊急擊城山を攻囲み九月十日満祐自

殺教祐出奔以来長祿三年に至り赤松の旧臣石

(第壹號)

見其三種之神器を昇き禁中に入札奉りしに據

て赤松政則赦免を蒙り加賀半國を賜ふ年曆十

八年の間赤松氏に關係の事のみを擧たる書也

一 應永記 一冊

此書は應永六年十月大内左京權大夫義弘入道

諤言を信し大樹義満公を恨み於泉州堺企反逆

嫡子新介執事平井備前入道等雖為諫争入道不

承引以禪僧絶海從義満公被宥をも不聞入不敬

之返答に寄り同十一月八日義満公為親征東寺

迫出馬細川頼元京極治部大輔入道斯波尾張守

同^左衛門佐赤松上総入道等多勢先達而出陣し
於攝河兩州合戦し同廿九日遂に堺城に攻寄せ
及大戦寄手北畠少将戦死す大内一味の大名に
は土岐宮内少輔入道は尾張國より美濃に乱入
し山名宮内少輔は丹波國宮田へ討入京極五郎
左衛門は江州守山に兵を起し於各所合戦悉く
不利にして同十二月廿一日遂に義弘入道斯波
尾張守か為に戦歿し從臣森民部丞杉豊後入道
等は同死新介以下は降参城廓は被焼拂に終る
此一乱之外無他事

(第壹號)

一 常陸関城繹史

宮本元球仲笏著

一冊

嘉永四年辛亥正月自叙

此編元弘三年六月五日より正平十四年七月に

了北畠准后親房入道宗玄之忠貞雅量の偉績を

諸書より採萃し関城書之謬を正し不足を補ふ

引用書目一百余种に及べり

一 大内義隆記

此記は義隆戦國に生れ武事を忘れ奢移に長し
其領國宇佐箱崎嚴島等の社頭を造立し於山口

古蹟保存会

春日明神多賀之社を建立し卜部兼右を召下し
て神道の行事を傳受し仁和寺尊海僧正皆明寺
堯潤僧正山門の豪仁法印醍醐の源雅僧正等の
貴僧を甲下して種々の法事を執行させ新造の
佛閣を於所々建立し二条殿三条殿廣橋日野柳
原其外公御殿上人外記官務北面の輩迄下向し
て公家之交り斗りをなし朝夕遊宴には歌會管
絃に耽り師哥道の師範は飛鳥井大納言雅俊有職
之師には日野大納言資宣廣橋大納言兼秀郢曲
には持明院中納言基親裝束之事は冷泉紹惠入

(第壹號)

道管絃は東儀因幡守岡兵部儒業は清三位伊治
等に學ひ奢移到卜さる處なし侍臣相良遠江守
武任を愛し老臣陶尾張守晴賢と不和を醸し杉
伯耆守重知内藤興盛等加黨に及五千余騎を引
奉して不意に山口代へ乱入し相良の邸を燒崩す
餘炎法泉寺龍福寺其外神社佛閣を乱妨し義隆
小勢にて防戦に不及深川の太寧寺に落行冷泉
判臣隆豊黒川隆像天野隆良岡部隆景等主従十
一人天文廿年九月朔日遂に自殺す其後相良武
任を筑紫前にて打殺し頸を獄門に懸け杉豊後守

古書保字會

斗於糟屋濱討礼平賀新四郎隆保も義隆方にて
屠腹寸陶は豊後より大内の家督を為迎同安房
守杉勤ヶ田飯田石見守を始め多々良の濱に着
船し山口へ入て狼藉を静謐に及ふ迄之記也

一 北條五代記

十冊

三 浦浄心撰

此編は撰者曩に所著見聞集三十二冊の中より
北條氏茂入道早雲以来氏細氏康氏政氏直まで
五代之方箭之沙汰而已抜抄し時代混雜前後を
取交ゆ乍去浄心は小田原浪古老の名高き者故

(第壹號)

時日は證すべし此書は慶長十九年冬の編集に
して既に書中巻第三應永より慶長まで関東合
戦の次第に慶長十九年甲寅十月の比ほひ秀頼
公將軍秀忠公へ對し鉾楯則秀忠公諸軍を卒し
摂州大坂へ發向城を攻給ふ秀頼降参身命無事
に有之同き極月下旬落城之事を記し夏陣落去
之段は不載之也

一 淺井物語

六冊

此書は嘉吉の頃三條中納言政氏卿有故江州佐
々木京極へ被召預於謫所一子を被設後年淺井

新左衛門重政と名乗り京極家に奉任す其子新
三郎忠政其子新三郎賢政其子亮政為家督永正
五年上坂治部大輔景重被奉仕し十五歳の初陣
より度々戦功を顕し同十三年三月九日景重入
道恭貞齊病死し養子治部大輔為家督上坂に在
城せしを亮政逆心を起し同年八月不意に城を
乗取次而今濱城を拔小谷山に居城を築き武威
を振ふ同十四年五月為追討京極勢發向す寄手
阿閉三河守海北兼右衛門赤尾孫三郎村山甚次
郎等反心して却て城に入る亮政勢を得て京極

(第壹號)

并上坂勢を破る佐々木定頼の扱にて和睦を結
ぶに終る全く淺井家の成立を記する処にて亮
政の子下野守久政其子備前守長政等の事は載
せず

一 螢蠅抄

六冊

塙保己一著

文政八年二月靜寛堂主人并自序
此書仁室やけのおほせ事にて代々の古ふみよ
り異國のえみし等りちは國をりかゝひたりし
事をぬきいて、五卷となし奉ふれし也螢蠅抄

古書保序會

といふは自序に曰こは螢火のかゝやく神五月
蠅ちすあしき神のあふひにてえみしふの此國
にあたする事あり共やかて神風に吹やふれ
れて遂にうれひをか人理りき世人に知れせ
むと云云引用する書目一百廿五部開化天皇
十九年新羅國と合戦より記し應永十五年十一
月に終る附録は本書に洩たりしを擧る此記古
記を其儘抄出してまゝ今按を加ふる編中文明
弘安の事跡は殊に詳なり

一 甲陽軍鑑

二十冊

高坂彈正忠昌信著

發端九ヶ条之書置有之此編は信玄分國中仕置
五十七ヶ条并舎弟典厩子息へ異見九十九ヶ条
を初めに載せ次に信玄父信虎を追出之事晴信
發心信玄と名乗事春日源五郎立身信玄同時代
諸國大將之評備定の談合の事鈍過たる利根過
たる弱過たる強過たる等の大將の評以上命期
卷為四卷武具其外道具の穿鑿諸奉公人喧嘩の
仕置方法の事武田家人數積大概從是信玄一世
大小百廿戦之勲積諸士の戦功自是以下軍律軍

古書保字會

法の諸法式其外心得之条々数十条公事卷七十

八九十五ヶ条信玄十ハオヨリ五勝頼信勝の代

の事は昌信死去の後春日惣治郎書之以下二十九

勝頼家督より於天目山最後の後家康駿甲信の

所置井伊万代立身并家康秀吉取合迄を録す

甲州流の軍法は全く此書より出末書秘傳口決

抔殊に多し

一 甲陽軍鑑評判 十冊

伊南芳通著

此編天文七年晴信家督の初めより元龜三年濃

(第壹紙)

州發向に至る迄三十七年間の戦事を採萃して

評判の言を拾ひ三将三将は信玄得失の理用を

管見す其平素の事状は繁多なるに依て省之編

中陣図を多く載此甲陽軍鑑の大抵辞浅ふして

心深く筆勢巧にして而も容易の如し讀者可味

其書中多くは偏執に未て公明ならず故此書其

探要論是非過を刪る事不少卷末に三将の惣評

を舉たり

一 甲陽軍鑑末書結要本 九冊

高坂彈正忠昌信著

此編第一佛法の沙汰九ヶ条第二人間之貴賤上
 下作法様子の別なす噂十五条第三有蹈心の六
 者六ヶ条右六者之様子格之批判三条右有蹈心
 之六者を見知る三段九条第四善悪の人六条柔
 弱者廿三条柔弱者本宿老出頭人邪道より起る
 五条近代家中忠使成大将噂五条大将善悪六品
 四条右之明将十一条當代六大将の噂之事元就 氏廉
 信玄謙信盛氏 信長第五塚原卜傳噂五条信玄名譽四十二
 条以下七ヶ条ノ謙信名譽四十二条以下五ヶ条信長名譽
 十一条以下五ヶ条第六唐國賢聖四条國持大将方矢

(第壹號)

之格ある九条古今の大將衆批七条右に付人の
 批判する三条第七信玄御家風定之七条信玄御
 作法行儀八幡宮へ社參被成五条番頭組頭足輕
 大将足輕迫之行儀三条外振様小身者邪正見定ノ
 三条諸持無珍物入禁制三条地取合之沙汰三条
 一國內地取合七条小身之士武功之様子三段之
 事國侍之方矢三条信玄軍法御備定七条奉行浮
 勢六条小身之武士走廻り御定九条小身之武士
 比興働無是御定十五条第八第九兩卷は軍法の
 卷にして城取繪圖備立の圖小物見馬乗之圖繫

物見の圖其外信玄弓箭の批判等数ヶ条舉る奥書に曰

天正六年戊寅正月吉日 高坂彈正昌信

一 信玄全集末書 二十冊

第一軍法卷第二三城取卷第四五六内試卷第七

出陣第八九陣取卷第十十一戰地第十二三戰第

十四人事第十五城攻第十六七八兵器第十九雜

記第二十上下年譜此年譜は自大永元年至天正十

四年九六十年間大永元は信玄誕生之年也天正十四

年は秀吉公妹濱松へ入て家康と嫁娶して其間

(第壹號)

武田家之盛衰等大概書記す則年譜は小幡下野

外記孫八郎西条治部書之と奥書あり又城取之

卷に山本晴雪馬場信房傳授信房又早川弥三左

衛門幸豊に授け小幡勘兵衛景憲自幸豊傳受す

云々此等名を故人に假り世人之信を得むと欲

す也

一本朝戰略考 写 十冊

此編は武田信玄一世之戰記にして十六才信州

海野口之初陣より四十二才の永禄四年九月十

日川中島之合戰迄其間於諸州之大戰のみを擧

け小迫合は省略す且陣圖を載て勝敗の得失を
評論し山本道鬼真田幸隆之武略等数条を記し
克く正し得たる書也

一 川中島合戦記

三冊

此書は川中島之合戦諸書に一度として誤り多
き故前後五々度之取合を悉しく區別して見易
かゝしむ上卷は河中島五戦の記中卷は上杉内
清野助次郎井上隼人正へ就御尋書上候川中島
合戦之次第書下卷は千賀源右衛門直談南麻
直談横田甚右衛門 等也千賀は越後浪士其

(第壹號)

此酒井修理大夫家来南麻は元上州松橋之城主
にて天海僧正之取持にて紀州へ被召出横田は
甲陽之名士にて其比旗下に有之各有名之士而
已也

一 三國擾乱記

写

六冊

卷端撰者之漢字假名之両序あり
此題目之三國は薩隅日の三州にして嶋津家之
元祖忠久より秀吉公九州平治兵庫頭義弘家督
相續また歴世之治乱盛衰を詳かに記し又は三
國諸士之傳及ひ古城主之由来或は嶋津統州家

古書保字會

之事相州家之事伊集院之事其他数家之戦功事
績を記す

一 橘山遺事

五冊

鵬御帆足万里著

弘化三年三月安積良齋及岡弘道漢字之兩序

此編は永正十年三月より天正十五年三月に終

り立花鑑連入道道雪左近將監宗虎之二代九州

所々の戦闘を顯著し其勲績を詳にす戸次軍記

西國太平記同盛衰記筑紫軍記陰徳太平記肥陽

軍記鎮西要畧等は虚謬多き故採りず引用之書

(第壹巻)

目は卷首に附録する處三十部大概立花家譜事
記の類のみ委く漢字を以て全文を録す

一 信長記

十五冊

太田和泉守牛一編輯

此記小瀬南庵道喜之重撰にして義輝將軍為三

好松永等被弑害義昭公南都没落濃州へ御勤座

信長へ御依頼織田家先祖之事信長出身より一

世之戦功を粗記し遂に逆臣為光秀於本能寺屠

腹し給ひ嫡信忠又於二条城自殺付早世之評滝

川一益北條之多勢と快戦猛威を示して尾州に

古書保

歸陣する迄に織田家主従の馬驗を載す又自汗集と題して治國平天下の要道を概略し和歌を詠し添へて見易からしむ且諸書と異説不少

一 天和八年仲冬梓行

九冊

太田和泉守牛一編輯

此書は信長公甲信御進發武田一族滅亡より秀吉公西國發向光秀及逆信長公父子自滅秀吉公備中高松城を抜き毛利三家と和睦し於山崎吊戦明智一類亡滅信孝不平を起し秀吉公濃州へ

(第壹號)

發向賤ヶ嶽之一戰勝家信孝敗死次而紀州根来寺追討佐々成政及逆越中へ進發直仁平治長曾我部元親降伏諸國知行割聚樂亭行幸和歌之御會諸國檢地目錄朝鮮御進發人数積秀次公行状并御妾衆之辞世松永彈正分別齋藤道三明智光秀身上柴田勝家武邊之小田原御征伐諸侍衆へ知行割四國へ高麗船漂着秀吉公醍醐寺花見之遊宴末了を記せり

一 織田真記

十五冊

織田丹後守長清著

正徳丙申季春北村可昌并撰者之函序
此編は太田牛一手筆家録を増加したる由にて
余之記とは格別正しく為奇談珍説も多く日本
体なり永禄五年十月廿九日立入頼隆磯貝久次
為勅使尾州に下向於道家尾張守宅論旨を信長
に賜ふ之件あり外書に不載之立入氏家記に道
家祖看之所記以載之由元龜二年九月禁裡を再
造し堂上諸家之廢絶を興し金銀を京都の商家
に配り其出才處の息を毎月朝廷へ献納せしむ
此等の勲績は余本に見不見太田牛一之所撰は明

(第壹號)

智乱後穴山梅雪為一揆所殺了此編は信長公於
大徳寺為葬送太政大臣從一位を賜贈ふるに至
る迄書記之

一 播州佐用軍記

写

二冊

川島忠左衛門正交編輯

此書は天正五年七月上旬秀吉信長公之命に依
て播州へ下向其比當國は東八郡は別所長治所
領し國府之二郡は小寺氏領し西北の五郡は佐
用郡上月之赤松藏人領せり秀吉小寺氏の府中
の城江下着あり小寺氏無故剃髮して行方不知

依之其臣黒田孝高従身して當國平治に盡力す
るに始り上月の城主赤松政範舎弟治郎政直叔
父右馬介正澄以下毛利家に一味して秀吉の命
に不従及鼈城同九月廿二日より鬪戦相起り於
所々取合十一月晦日其端城福原を竹中淺野等
に攻被拔城主右馬介正澄自殺し上月城には備
前の浮田家より為後詰に付毎日得勝利同十二
月十日城兵又切出次郎政直以下数軍輩打死同十
二日蜂須賀谷及夜討斗略艱詰して無功同十四
日には城兵より夜討す同十五日城兵又切出官

(第壹號)

部善祥坊敗軍其余日夜城兵諸口へ切出苦戦數
度に及同十八日糧米盡て城主政範一族多勢自
殺太田民部重行柏原主馬盛吉芳賀貞吉以下戰
死同十九日に到り平治山中廉之介為大将八百
余人秀吉より被入置同月下旬姫路へ開陣し給
ふに終る
万治三年立秋撰者川島氏之末葉某之序に曰
川島正友は池田輝政に仕其父赤松右馬介正
澄は佐用鼈城自殺人之内にして落城之砌正
友十才未滿にて父之命に依て弟西人并家臣

新書保

早瀬正規介抱し同國書写山に潜匿中上月城
内之日記を猶原八兵衛櫛田久藏桐山市之進
廣沢入道俊軒等四人之執筆より傳写し其比
於京師信長記を梓已成と由を聞て正友京師
に登り此書を併せて刊行せんとす信長記已
梓成と云て書肆不肯空く書を懐にして播州
に歸る正友之子忠太夫正興又同姓忠兵衛好
和に傳へたるよし明曆元年未三月好和の序
に載又万治三年之序も有之

一 勢州軍記

写

二冊

(第壹號)

此記卷端に北畠家之系圖を擧げ編中之標目は
勢州諸家 乱世形勢 義賢兵乱 信長出張
勢南兵乱 信長治世 具教騷動 諸國退治
光秀騷動 信孝兵乱 信雄兵乱 秀吉治世
此書國司北畠家代々の事工藤一家関一黨其外
諸侍之事足利義政以来慶長五年関ヶ原以後天
下治世に到るまで當國諸城主諸侍の興廢を記
し卷後に長野之城主長野家十六代之家譜を載
す寛永之始此撰述せしものなるん歟書中に考
ふる處あり

古書保存會

一 山田軍記

写

一冊

此編は自治承四年正月至慶長五年九月此間勢
 州山田に於て惣て廿六ヶ度之戰鬥を記す就中
 文明十九年正月二日外宮之正殿に於て村山武
 則切腹放火大逆之始末を詳かにせり引書は東
 鑑以下三十三部殊に勢州軍記の誤りを衆く正
 せり

一 天正伊賀乱記 写 五冊

此書は伊賀國侍由緒之事天正之末北畠信雄卿
 當國に打入につき地侍不服遂に於所々及籠城

(第壹號)

蒲生氏郷筒井瀧川丹羽以下信長公之命により
 四方より乱入日夜之爭戰地侍共よく防戦粉骨
 を盡すと雖も衆寡不敵自滅をなし餘禍國中
 寺社を焼拂ふに至る之始末を記す

奥書

去冬在伊賀名張客館借中村子之本及村邊子
 本其全部五卷此本就其中刪正繁文欠字者也
 携歸今春孟正講談休暇之間書写了其原本亦
 誤写以備他日之参考云

享保甲寅孟春初八夜之夜

松岡怡顔齋

古書保存會

一 豆相記

一冊

此記北條早雲成立より天正十八年七月十一日
五代之孫氏政氏直滅亡迄而卅余年間之事を録
す編中北條高時之子時行其子行氏其子時盛其
子行長其子氏盛号伊勢新九郎行年七十而出家
法名早雲寺宗瑞とあり兼文按に早雲初の氏茂
又長氏と稱し時盛と号する所見なし其家系の
如きも伊勢氏にして相州北條にあらず誤りと
云べし

一 西州軍談

写

五冊

(第壹號)

竿貞子五長著

享保十六年四月白雲堂徳榮并撰者之二序

此書應永六年に起り大内大友菊池龍造寺嶋津
秋月毛利高橋等之盛衰より天正十三年秀吉公
之内命に依て本願寺教如上人九州へ下向嶋津
義久兄弟武威に誇り秀吉公之命に不従却て長
曾我部信親十河一存を於豊後國打取依之同十
五年三月朔日秀吉公大坂御進發九州御征討義
久遂に降参豊後肥後又命之國侍被誅宇都宮鎮
房黒田孝高に被切害文禄元年朝鮮陣清正行長

渡海勲功或は大友義鎮御折檻慶長五年関ヶ原
乱之節豊後國石垣ヶ原に於て黒田如水與大友
合戦肥後宇土城清正へ開城毛利勝信小倉没落
之事同八年三月廿三日家康公將軍宣下に終了
卷末に豊前國古城記を附す此書豊前一國之事
跡は詳細なれと他國は至極粗漏なり

一 大友記

写

一冊

建久七年三月十日右大将頼朝以豊後國賜大友
義直其十九世義長之代大永七年十月與星野伯
耆守於筑後國合戦より記し其子修理太夫義鑑

(第壹説)

其子義鎮三世之戦記にして義鎮の子義統の世
朝鮮之役被闕國其子義乗之次男正照明暦三年
九月高家衆と成に了然而編中に関ヶ原之時豊
後國立石原に於て義統敗軍之事を不載は不審
也

一 柴田退治記

一冊

大村由巳編

此記は信長公横死之後秀吉公與柴田勝家確執
起り江北賤ヶ嶽に於て合戦勝家敗北居城越前
北之庄にて自殺之始末秀吉公大坂に築城勲功

右
書
保
子

之臣各賞典を賜るに至る天正十一年十一月由
已謹誌之奥書あり

一 志津ヶ嶽記

四冊

浄信寺雄山撰

卷端洛泗山本正信序

此書は江州伊郡木、本村浄信寺地藏別當雄

山之自述而雄山は横山和泉寺家政か曾孫治郎

左衛門成陳か子にして母は浅井備前守長政か

孫同國坂田郡長沢村福田寺慶安之女也浅井三

代記十五冊賤ヶ嶽記一冊を撰す雄山多年深思

(第壹巻)

編集する處の書なりしを他人の手に版本せし

れ作者の名なふして知者なし遺憾に不堪實弟

江北隠士梅庵伊吹玄瑞採筆於平安城下と深切

の序あり本編は賤ヶ嶽合戦之濫觴より勝家於

北之庄自殺佐久間盛政柴田於國之西將伏誅に

了

一 柴田戦記

写

二冊

石庵鷄子編

萬治二年三月自序一名柳瀬戦記

此記柴田勝家與豊臣秀吉公及確執賤ヶ嶽之闘

戦毛受家照之忠死七本鎗の高名勝家屠腹佐久
間盛政就刑秀吉公官位昇進築城大坂了然以太
谷記及豊臣家譜に遺漏せし事を擧ぐ就中勝家
贈堀久太郎之書翰秀吉信孝へ之返簡等は外書
に見見處也白石伸書に柴田勝家は平氏なりと
載ふれしは全此編に據るか勝家の素姓平氏に
して其先奥州より出て尾州に來り備後守信秀
に仕ふと書す天野信景は斯波之廉流源氏なり
と書せしは如何に哉

一 岡本慶雲日記

写

一冊

(第壹號)

此記は岡本慶雲者初佐々成政に仕へ後被出召
加州利家馬廻り士と成天正十二年の春より同
十三年九月に至り利家成政越中陣の始末を委
細にしたる書にして永見右衛門へ送りし跋あ
り末森の後沿越中之所置杯これに過たるは無
るべし

一 豊鑑

四冊

竹中丹後守重門著

此編假名書にして秀吉公一世の事蹟を記す太
谷記と異同不少其篇目は 長濱真砂 高松

右
書
保
存
會

袖露 吹上演 内野行幸 清見写 高廉之乱

自序跋あり奥書之末に重門之自詠を載す

残しおく筆の跡さへ末とけてあたに消にし

秋の夕露

一 聚樂物語 三冊

此物語も假名書にして記する所は秀吉公御事

西國發向之事山崎之事天下を治め給ふ事秀次

公御養子に成給ふ事淀殿の事若君誕生之事秀

次公悪逆之事木村常陸隲謀之事田中吉政内通

之事阿波杵異見之事秀次公最後之事木村父子

(第壹巻)

熊谷直之白井備後阿波杵等自殺之事若君誅戮

三十余人女房最期之事等に終る聚樂は其比秀

次公の御所なるを以て斯は稱せり

一 朝鮮征討始末記 九冊

對州山崎尚長編輯

文政戊子年夏日對州講官川士纓嘉永七年三月

朝川同齋黒河春村等之三序巻首に朝鮮國歴代

略紀同八道附八道之圖を載す

此書朝鮮國壬辰之役たり也朝鮮征伐記同太平

記を始め諸家の記録且聞書覺書等世に流布す

古書保子

ると雖も遺漏或は誤謬数多なるを以て懲毖録
之和解にして對州某之所著之壬辰録或は武備
志之朝鮮考及征韓記等を摘録して参考し本朝
明國朝鮮之説に參伍符合せしを擧て証據とし
一事毎に併書して為見人安からしむ克く精々
之良書也嘉永七年寅初冬刻成對州村倉次郎藏
板とありと藩力を以て編製せし書と覺ゆ
一 太閤記 廿二冊
小瀬甫庵道喜輯録
卷端寛永二年孟春之自序次凡例あり此書太田

和泉守牛一之記を添削する處也

卷一 秀吉公素生より大沢治郎左衛門之
事に至る

卷二 因州鳥取落城より淡路平均に至る

卷三 高松水攻信長公横死山崎合戦信長

御葬送

卷四 能登國動乱前田利家末森後卷

卷五 柴田勝家并織田信孝と秀吉鉾楯之

件

卷六 賤ヶ嶽合戦勝家威政始末柳瀬戦功

古
書
採
集

者被賞事

卷七 根末兵火四國退治関白拜官大佛殿北

野大茶湯

卷八 知行割成了成政之一件

卷九 信雄與秀公鉾楯池田勝入戰死秀吉北

伊勢出勢

卷十 莖紫陣幽齋道之記

卷十一 聚樂行幸

卷十二 小田原陣一件奥州九戸事御知行割之

事

卷十一 朝鮮陣之卷

卷十六 吉野醍醐花見高野詣伏見城取於大坂

御能之事

卷十七 秀次公之事并女房達生害之事

卷十八 諸士之傳記十六人

卷十九 山中鹿之介傳記

卷廿一 八物語

卷廿二 諸奉行母衣衆御遺物事伏水學問所之

記

寬永三年孟商朝山意林庵素心跋万治四年卯月

梓行

一 長久手日記

写

一冊

村越茂助著

此記は天正十年六月信長公薨逝より筆を起し
 同十二年三月三日内府信雄之重臣岡田長門守
 津川玄蕃淺井田宮九等被誅しより遂に秀吉公
 信雄公と確執徳川家康公義心を以て信雄公を
 補助し尾州小牧長久手に大戦池田勝入父子森
 武藏等を打取三好秀次堀秀政之軍を破る始末
 より同六月十六日秀吉公大坂へ御帰陣に至る

迄を録す

奥書

長久手記三冊之内長久手日記と有しは村越
 茂介覺書にて文牒は~~拙~~御座候得共實録に御
 座候右三冊之外諸家記録有之候得共何れも
 附會異説有之信用難成候以上

松平太郎左衛門

一 朝鮮物語

大河内茂左衛門秀元編

此記一名光録物語又秀元高麗陣日記と号す

記者秀元は太田飛彈守一吉に属して彼地に航
海し在陣中の日記なり蔚山之麓城などは他書
と異なる事のみにて信し難き説も不少卷末に
至り秀吉公薨去之事を荒増に書すれ共是又疑
敷説の数多にて一身之武邊を飾り信を人に得
んとする如き卑劣之手段とは不見共無覺束事
まゝあり其子造酒允秀連寛文十二年正月奥書
す
一 黒田記 写 五冊
此書一名祖父物語と号す黒田勘々由孝高入道

如水之成立より甲斐守長政一世之軍功を記し
城井谷に宇都宮鎮房を害し朝鮮之役関ヶ原の
始末此際如水武威を九州に輝す次第豊前入國
之事などは殊に詳也且其臣栗山備後井上周防
母里但馬等の傳をも附録せり
一 毛利記
飯田平次兵衛信景編
此篇に記する處は贈従三位大江元就卿五男徳
田治部大輔元清之息従三位参議秀元卿其叔父
筑前中納言小早川隆景卿之識見を以て其智勇

を
知
り
本
家
輝
元
卿
之
為
養
嗣
十
三
才
に
て
朝
鮮
之
役
總
督
に
任
せ
ら
れ
て
渡
海
し
所
々
に
於
て
勲
功
を
顯
し
歸
朝
の
後
關
ヶ
原
之
役
無
双
之
剛
腸
を
人
に
知
ら
れ
輝
元
卿
實
子
秀
就
出
生
に
よ
り
身
を
退
き
別
家
を
立
ら
る
茶
事
に
堪
能
に
し
て
家
康
公
秀
忠
公
家
先
公
を
招
請
せ
ら
れ
し
事
な
と
一
世
之
録
事
也
此
記
其
始
の
家
臣
三
吉
藤
右
衛
門
規
為
之
編
集
に
し
て
其
藩
主
之
命
を
奉
し
て
記
載
せ
し
に
文
録
年
間
以
來
は
同
家
臣
飯
田
平
次
兵
衛
信
景
内
藤
角
左
衛
門
良
親
を
為
證
た
る
よ
し
跋
文
に
載
す
慶
安
三
年
寅
仲
秋
輯
録

古
書
保
存
會

白
石
伸
書
曰
毛
利
記
但
し
六
卷
と
五
卷
と
の
二
通
り
有
六
卷
の
は
毛
利
宰
相
秀
元
之
家
人
集
め
た
る
なり
五
卷
は
元
就
記
共
云
則
此
六
卷
は
こ
れ
を
指
せ
し
也
一
若
狹
代
々
記
写
二
冊
此
書
之
記
体
日
記
書
に
し
て
若
狹
國
主
代
々
之
録
事
也
武
田
大
膳
大
夫
元
信
以
來
其
子
伊
豆
守
元
光
其
子
元
慶
其
子
元
實
其
子
信
豊
其
子
義
統
其
子
孫
八
郎
元
明
之
世
天
正
十
年
七
月
十
九
日
生
害
丹
羽
五
郎
左
衛
門
長
秀
國
主
に
被
任
同
十
五
年
淺
野
彈
正
少
弼
長
政

古
書
保
存
會

に改任文禄二年より羽柴少将勝俊慶長五年よ
 り京極若狭守高次其子少将忠高之世寛永十一
 年七月出雲へ轉國する迄に到る甲斐安藝若狭
 三武田之家譜淺井家之系譜をも附記し代々之
 國主神社佛閣之造立或は變事又は鬪争復讐等
 の小事等まてまゝ他に見する處の美談をも録
 せり
 一 三河記 写 十冊
 大久保彦左衛門忠教編
 此記一名三河物語と号す同号之異本あり徳川

家
 康公御先祖之事徳阿彌之事泰親信先清康廣
 忠六代之事大概を述べ家康公一世之事蹟は小
 牧陣迄は詳にして其以下秀吉公と和睦之條よ
 り薨去に到りては粗載之卷の六の奥に曰元和
 八年壬戌卯月十一日子供に是をゆつる門外へ
 必ず出すべからず云々
 兼文曰大久保彦左衛門之手記と稱する類本
 数種有之其名を假り虚を飾り信用なし難き
 もの也平岩親吉の三河後風土記之類ひなる
 にや

一 糸田川記

写

一冊

此記は細川持隆其主足利義植公之一男義冬を
 補佐して欲揚義旗其臣三好義賢為義兵之妨而
 却而持隆を弑すに起り持隆之遺子掃部頭真
 之を義賢取立て為嗣子永禄三年三月九日畠山
 高政於泉州久米田義賢を亡し細川之舊臣桑安
 藝守野田内藏介仁木日向守小倉佐助等謀回復
 又三好長治が為に亡され同舊来大栗右近之一
 子宮之丞為忠孝戰死同五年八月真之父持隆之
 仇義賢之子長治を於撫養打取長治之弟存保継

(第壹卷)

家督不意に真之を於大井館令自殺其臣仁木伊
 賀守真之之子石見守之熙を供奉して密に通す
 之熙初名六郎父の仇存保を為討蒙重創楠根村
 に逸居す其子縫殿義則蜂須賀家政之世代官を
 勤め其子治兵衛義継又元和中淡路之代官たり
 不幾而辞職専農業此間於所々小迫合迄詳記す
 此書阿波國那賀郡櫛淵村之莊官糸田川治左衛
 門家記也寛文三年孟冬之奥書有
 兼文曰糸田川は細川之分字にして阿波細川
 之家記也

古書保存會

一 三好記 写 二冊

此篇は三好長慶同義賢安宅冬康十河一存四兄弟之武功より長慶嗣子義詮毒殺に逢松永久秀暴威を以て阿州を乱し十河存保又國政を紊亂し義輝將軍を弑し君臣不和之虚に乘し長曾我部元親其國之諸侍を方便打て四國を平治するに終る卷端に三好系圖を載たり

一 武徳編年集成 九十三冊

木村高敦編輯

元文五年九月大宰純天明六年正月高尾信福源

(第壹卷)

直義三序

此書天文十一年十二月廿八日於三州岡崎城家康公誕生より元和二年十二月薨御後七十五年之事實を日記に綴る卷末一冊は神号御贈位并日光山神廟創建の略記就中自六十四卷至八十九卷悉難波之役たり然而姉川三方原長篠長久手之四戦は四戦紀聞の脱漏而已を挙げ関ヶ原之役は此曩に武徳安民録の撰あるを以て是に譲りて不載之其餘家康公一世の功勳は無不記闕疑正誤精撰を極めたり共可謂編也

古書保存會

一 駿府政事録 写 八冊

羅山林道春撰

此書慶長十六年八月朔日より同廿年十二月廿

九日に到る迄の日記也卷端に曰先是史官記天

下之大事以除小事之由是從今歲辛亥八月朔日

新置史官記起筆以記毎月毎日之事書中大坂西

度之役微細にして首帳迄載之

一 岡崎物語

此編は天文十一年十二月家康公於三州岡崎城

誕生より元和三年四月十七日日光山へ御鎮座

また御一世之事實荒増を記せり

一 落穂集

写

十六冊

大道寺知足軒友山撰

此集は家康公御誕生より廣忠公御内室御離別

織田信廣と人質替之事竹千代君於駿府御成長

御元服御誓儀初陣之事信康君誕生尾州大高城

兵糧入之事信長と和睦一向乱の事朝倉義景為

追討御加勢之事 大野和石 長篠合戦 小畑勘兵衛

信康公生害 天方城 高天神城落去之事信雄秀

吉確執長久手之義戦 結七條 勘介物語 秀吉公御和

平御誓儀御上洛淺野長政之臣德北條為追討秀

吉公駿府著陣山中山城北條家老松田尾張守逆

心大藏寺内小田原陣中異說之事野一知柳石并に進大

永金兵衛結關東御入國之事朝鮮征伐之事秀次

公滅亡之事内大臣御昇進之事蒲生秀行所替秀

吉公薨御内府後見之事奉行中と不和之事関ヶ

原前後之始末大坂落城天下泰平に到る迄之記

にして古老之物語を録す其古老といふは米村

權右衛門大野之淺香左馬助元石田石坂與齋上

結岐勘介蒲生八木但馬守丸毛五郎右衛門徳川

吉岡九左衛門淺野牧尾是休齋大坂逸見拙齋堀

尾永原兵右衛門又十方院兼重勘入齋毛利一柳

助之進一柳五十幡和泉本野田寺澤角右衛門寺澤

福垣與右衛門大坂小木曾太兵衛内藤老齋喜多

見宗幽三輪大學兼重勘九郎河村所右衛門等之

物語又は淺野因幡守之直話杯を擧ぐ奥書あり

子や孫の為とばかりに記し置

稗交りの落穂なれとも

享保十二丁未年冬至日

大道寺知足軒友山

古書保存會

(第壹號)

古書集

八十九歳認了

一 得川記

写

三十册

此記第一卷は御系圖得川家御先祖事御改名之事を記す第二卷は大永三年松平清廉御家督より天文四年横死廣忠公嗣封同十一年家康公誕生夫より御一世中之大小合戦薨御之後神号贈位に到るまでを録す貞享元甲子冬十月八日於東武書之と有之其撰者を知らず

一 関原始末記

写

二册

林春齋撰

(第壹部)

明曆二年丙申二月十七日漢字之序跋

此記は若州侯酒井讃岐守忠勝朝臣執政中林羅

山春齋之父子に命して撰集せしむ處にて慶長

三年八月秀吉公薨去より筆を起し同六年十一

月五日に終る其間濃州関ヶ原大戦之始末を詳

にし家康公勝利を得給ひ天下泰平に帰したる

次第文意を飾らす實事を擧げ脱稿之後將軍家

へ呈せられたる書也

一 大谷記

六册

此記は慶長三年戊正月十日より同五年十二月

古書集

十二日迄之日次之記にして関ヶ原大乱之始末
を悉細に寸編中桑名大垣小倉三城之圖を載す
撰者大谷吉隆之子大學之手記なりと兼文按に
是又例之名を高名家に假る者なり雖然他書に
洩たる異説少々可采用有之故録之了

一 東遷基業

写

三十冊

佐久間健編輯

此書は家康公御誕生より御一世之事蹟を微細
に擧げ日光山遷座宮号宣下までを俗文に書け
らげしもの也

一 家忠日記増補

写

廿五冊

松平主殿介家忠撰

寛文戊申之春弘文院林春齋序従五位下主殿頭
源忠房之跋従弟忠冬之増補也

此記は家康公之成立より関ヶ原役之比までを
書記し撰者家忠伏見城に於て戦死を遂けし後
其子忠房之書継き元和三年四月十七日に終り
又正保二年十一月三日宮号宣下之事を附録す

一 水野勝成自記

写

一冊

水野日向守勝成初六左衛門と号し父和泉寺忠

重之家臣富永半兵衛之讒口に據り父子不和を
生し無據富永を打て國遠し佐々成政小西行長
等に從ひ數度之武勇を顯し又蝦江長久手関ヶ
原殊に大坂兩度之戦ひは名譽之武功を立後作
州津山之城主十萬石を領したる一世之記録也
但し肥前天草乱に出張して其指圖之衆に群出
せし事柄を省きたるは如何成故にや
寛永十八年己五月日水野日向守勝成判
一 岩淵夜話 写 七冊
此編隨筆体にして家康公御一世之聞書なり

(第壹號)

新安手簡に曰岩淵夜話は實録と往々相見へ申
に付少々引用申候とあり
一 石川忠總留書 写 二冊
石川主殿頭忠總之留書と題すれと古老之集記
にて編中は明應三年七月上杉同名再乱の初め
より天正十二年三月尾州小牧陣迄は山中忠兵
衛之手記也
兼文曰忠兵衛始市作と号大久保相模守功臣
也
次に天正十年六月信長公横死之節家康公泉州

古書録存會

堺より御帰國之條より同十五年南明院秀吉家
康公北上州草津御入湯迄は加藤宗月記之又天
正十六下年上月上州神奈川に於て滝川北條取合し
り慶長五年九月関ヶ原以後迄附録に北條安藝
代々物語有之加藤宗月記之又永禄元年より寛
永十九年迄記者し札本又天正十年滝川上州合
戦より元和元年大坂夏陣御上洛まで卷中小田
原落城之事此記卷端欠亡又天正五年十月廿日
より日次にて文禄三年八月迄書中所々忠損不
少以上八通之古書を一篇に成せし迄也

一 武隠叢話

写

十冊

此編一名武話叢談神君御誕生より大坂陣後迄
之古戦之得失名将勇士之行状を記せし隨筆体
之書也

一 小島記

写

一冊

此書は小島勘兵衛景憲自記にして其祖父盛次
入道日浄父織部正虎盛兄又兵衛昌忠孫次郎在
直等武田家に仕て所々之戦功景憲徳川家に幼
少より奉仕し廿四才にて浪人し大坂冬陣には
加州富田越後之備に在て高名し翌年四月大野

主馬より被招松平定勝板倉勝重等に内談之上
為間牒入城^也辦舌を以大坂之良策を妨け忠を
徳川に納れ事漸々顯露に及辛して尼ヶ崎に走
り京へ遁る其忠節逐一ヶ條を以詳細に寸且景
憲若年よりの働を載す此書寛永十九年九月に
記す甲州流軍法を世上に流布せしは此景憲之
盡力する處也

一 慶隆記

写

一冊

美濃國郡上城主遠藤但馬守慶隆一世之戰功録
にして天文十九年より寛永九年迄之記事其家

(第壹號)

臣遠藤權兵覺書河合覺左衛門其他^外老人物語之
覺書長瀧寺引付帳其余古證文或は栗栖郷古老
聞書を捨拾し伊東玄柏櫻井玄登之輯録す處
也西人共遠藤氏家来也

一 秀頼記

写

二冊

此記は天地開闢代々之大略を録し秀吉公御遺
言秀頼公衰微之起りより大坂冬夏之戰鬥秀頼
公御母堂と共に自滅に終る國松丸以下大野長
曾我部等之仕置を載せす編中他書に齟齬せし
異説不少此書は江州之住士高木仁右衛門入道

宗夢か秀頼公の最期を見届けし物語と桑原求
徳入道之集めし草紙を本として編集する處也
一 北川覺書 写 一冊

大坂竈城之内北川治郎兵衛之所書記にて同
人は落城之後於八幡與山川帶刀就縛後得赦免
而後日に其籠城中之事を記す大概は夏陣之砌
秀頼公於御前諸將之軍評定より書記し後藤又
兵衛木村長門守道明寺若江西所にて戦死之條
は委細也後堂勢八尾表之苦戦五月七日落城之
砌之記事は尤奇絶なる事多し編中漸々六七

日之雖記實録之證とすべき書也

一 大坂陣後之記

写

五冊

此編は難波軍記之附録に為せしあり雖然難波
戦記は偽書にして無用又此記は別種之實録其
此之様子大に見る處あり編中は天王寺造營之
事大坂町中三郷に分つ事升屋之下人還住物語
河州豊浦岩窟にて吹田太郎左衛門刑戮之事和
州今井に落人來る事國瀨屋久左衛門事檜物屋
九郎左衛門事豊國神社禰宜馬大夫事井上清六
赦免之事等之十條を擧る

一 大坂御陣兩度始末記 写 十冊

此記は武徳大成記編集之致方不冝趣に付閣老

松平左近將監より御沙汰により林大學頭同百

助桂山三郎右衛門等改撰寸寛保二年七月廿五

日被仰付之同三年八月廿五日淨稿成て献納寸

處にて目次如左

一天正十八年以來御知行割之記 一冊

一御入國より慶長年間迄諸役人之記 二冊

一冬大坂御陣に付御觸出し之記 二冊

一冬大坂御陣攻口御備定之記 一冊

一夏大坂御陣に付寄口并御備定之記 一冊

一慶長元和之間御條目之記 一冊

以上十冊也此書一章毎に片書して其抄出す

處の引用書目を擧げ其証と為せり

一 元和先鋒録 写 三冊

藤堂大學頭高文跋

此編は尾州侯より藤堂侯江大坂夏陣之義御尋

に付御答書にして元和元年四月二日勢州安濃

津表出陣より日次に書記於所々戰毎に家臣之

古記録を以評注を加へ其真偽を正し戦功を詳
に才難波戦記攝戦實録以下之諸書とは相違多
く別更に八尾之一戦此書明白也増田兵大夫を
磯野平三郎打取三年の後漸々其姓名を知り其
外箆城士林甚右衛門戸波又兵衛等後日被召抱
而差出し候書付村井惣右衛門赤澤富右衛門等
覚書所々に書載戦死之後嗣加増之事或は追薦
之義まで擧たり明和六年春三月之編輯此書漢
文と和文との二様有之

一 大坂物語

二冊

(第壹號)

此書承應二年之刻本にて假名書繪入也冬陣よ
り夏陣落城まで荒増に記し巻尾に首帳を附録
す

一 福富戦記 写 一冊

福富半右衛門法名浄安之覚書にして浄安は元
土州之産長曾我部元親之臣也祖父は福富飛彈
とて元親先手之侍大将也父は隼人と云長曾我
部元親之為先手天正十四年九月廿一日筑紫陣
に打死す半右衛門初名七郎兵衛と云十七才に
て元親に従ひ朝鮮へ渡海して於所々に高名し

古書保存會

歸陣後慶長三年八月十九日於大坂元親病死後
 其子盛親に仕へ関ヶ原退口之働同六年三月出
 國伊豫へ渡り加藤嘉明に仕ふ同九年妻の父寺
 尾喜右衛門之義に付一族共に其宅を自焼して
 退去之砌討手を引請て高名し夫より尾州清洲
 へ立越へ岡半右衛門と改名窄人分にて佐和山
 の城主井伊之家臣中野越後方にあり越後病死
 其子助大夫之子造酒之介才十六を補助して大坂
 冬陣之働同夏陣には小畑勘兵衛と共に拔群之
 戦功を顯し其後寛永元年七月十三日尾州家に

(第壹卷)

奉仕する迄を記す

一 日本外史

廿二冊

山陽頼襄撰

文政十年五月廿一日少将樂翁賜了書を以て序

に換ふ次に引用書目二百六十部を擧げ漢字に

て記す

卷 一 源氏前記 平氏

卷 二 源氏正語 源氏上下

卷 四 源氏後記 北條氏

卷 五 新田氏前記 楠氏

古書保存會

卷六 新田氏正記

卷七 足利氏正記

卷八 足利氏後記 後北條氏

卷九 足利氏後記 武田氏

卷十 足利氏後記 毛利氏

卷十一 同 織田氏

卷十二 同 豐臣氏

卷十三 同 正記

此書世人無不知者且批評注釋之類殊に多く悉

除之

一 日本外史評

二冊

土持鹿持古義雅澄著

嘉永三年九月安並彌三八雅景之後叙

此評は嘉永三年三月廿七日記す處附録は同

年五月十二日之重記也近日之評注とは其處見

異なるを以載之

一 慶長日記

写

二十冊

此記一名東日記と号す慶長元年正月一日より

同十九年十二月廿九日に到り徳川家之記事日

記にて武徳編年集成に大同小異且粗漏なり

一 前親物語 写 一冊

大河内造酒允著

秀連者茂左衛秀元之嫡子也祖父善兵衛政綱剛
勇之語數十條叔父政勝政信其外一族之行跡を
載す卷尾に寛文四年正月秀連より加々爪兵右
衛門に送る由見へたり又家之系譜を附録にす

一 嶋原軍記 写 一冊

此書は寛永十四年肥州島原に於て耶蘇宗之一
揆蜂起之始末を詳かにす然も簡古之短篇なり
と其比誰人歟之手筆と覺へ外書に不載異聞珍

(第壹號)

説まゝあり有馬侯之老臣福次壹岐戦死之次第
あり是又他書に洩せり

一 嶋原合戦記 三冊

此書は寛永十四年十月下旬肥前島原耶蘇一揆
之濫觴より原し古城に楯籠り籠城堅固にして
打手之惣将板倉内膳正重矩憤死し西國之諸侯
を引請夜襲之働毎戦士兵得勝利松平伊豆守信
綱下著して遂に同十五年二月廿七日落城鍋島
甲斐守柳原越中守之戦功領主松倉豊後守父子
被處流刑了

古書保存會

一 古戰評談

写

八冊

神田伯龍子著

此書元亨利貞四種之内島原陣之部にして耶蘇一揆之類書数十種流布す礼と此篇に不及事實に遠し一事毎に必ず参考を加へ得失を論定し評語を下す精撰微細を極めたりと云ふべし

一 武野燭談

写

三十冊

卷端に撰者之自序あり此書は慶長之頃より元禄年間迄之抄録にして家康公秀忠公家光公家細公細吉公家宣公等より元老閣老参政其以下

(第壹號)

之諸尹に至り君臣之讜言卓行を記す就中家康公之釣命は井上主計頭本多加信松永左衛門入道伊東道齋等之私記より抜翠す其外寛永之比列國之諸侯之美政名を載す書中関ヶ原大坂西度之役或は島原之記事まゝ載之廿七八二卷は老人雑話之抜抄也此書全く政事之要略と云可謂歟

一 玉露叢

写

四十二冊

林春齋著

延寶二年神無月撰者之題詞あり

此篇慶長三年戊六月秀吉公御發病より寛文十
一年迄之日次にして大坂之事島原之事などは
殊に明細也其外諸侯之盛衰殉死追腹之事徳川
氏國始治政之事は此書を以見るべく假名書に
して俗通を專とす
一 本田忠勝武功集 写 一冊
忠勝初名平八郎中務大輔に任す家康公之功臣
にして武勲を以て勢州桑名十五万石を領す此
集に載する處は一番鎧之事二番鎧之事小返鎧
之事請留鎧之事城攻鎧之事附入鎧之事籠城之

(第壹號)

鎧之事鎧心持之事鎧度敷之事野合城攻鎧心
得之事其外城攻之武功又は組討之心得以下數
十條也其中鎧之事を專一に書す
一 國朝舊章録 写 十冊
此編は古人之著書中徳川氏國始之古典を分明
にせむと編輯所為也其目錄は如左
卷一 天下は天下の天下の論 明德新民等
之和歌 神祖御在世合戰場 御雷家
代々御院号之出所
以上 鳩巢室新介直清撰

古書保存會

卷二

除邑録

林大學頭信篤撰

卷三

武家執政之事

弘文院學士林春齋撰

執政智謀等并京都所司代法條之事

寬文二年癸卯之畧 新帝踐祚之事

御即位之事 嘉定之事

林大學頭信篤撰

卷四

本朝宝貨通用事略

新井筑後守君美撰

卷五

金銀米穀之事

(第壹號)

卷八

殊號事略

新井筑後守君美撰

卷九

朝鮮風俗之事

芳洲雨森東五郎撰

琉球事略

新井筑後守君美撰

卷十

先規より御家号を贈り家々之事

自

天正元年至元禄十六年世上之記

林大學信吉撰

一

日本外史補

十四冊

淡路岡田僑著

嘉永三年秋八月自序凡例次に引用書目二百部
 を擧ぐ此編日本外史之文體に擬し其補也題書
 すればと全く戰國各家の世記也卷一北畠氏卷二
 大内氏卷三今川氏卷四三好氏卷五長曾我部氏
 卷六嶋津氏卷七大内氏附立花卷八淺井氏卷九
 朝倉氏卷十字喜多氏卷十一里見氏卷十二伊達
 氏卷十三十四最上氏也
 一 常山紀談 十冊
 湯淺新兵衛元禎輯録
 元文四年五月自序松崎惟時漢字之次叙

(第壹號)

此編凡例に云此書天文永祿之比より太平に及
 不迄之事實を集め紀せり戰國の時勢徳川氏國
 始之風俗武人の言行皆世人の知へき處にして
 是輯録之本意也明君賢佐乱臣奸賊之勸懲に備
 ふるべきおのづから其中にあはるれは必し
 此評論せずと云々明和庚寅冬赤松勲之跋あり
 兼文云此編近世及上梓為三十卷雨夜之燈とい
 へる附録一冊あり写本の方至極宜敷版本は悪
 し
 一 寛永小説 写 二冊

古書保存會

四維山林道春撰

此編之次第は左之跋に分明なれは載之

此一冊傳稱寛永年中近臣永井日向守松平伊賀

守柳生但馬守佐久間將監等所語也我祖道春侍

座之節所聞粗有詳略矣同難決可否故加朱圈幕

下以備乙覽也

享保三年戊戌閏十月大學頭林信篤

一 近世外史 五冊

筑山足田棟隆輯録

嘉永六年冬假名自序

(第壹號)

此書上は永祿より下嘉永に到り名君良臣之道

に叶ひし言行を記し文武之励とするよし凡例

に載す名将之部良將之部智將之部勇將之部猛

將之部之五門に分てり

一 元寛日記 写 廿三冊

此編は元和元年丁卯正月元日より寛永九年壬

申十一月十六日まで十八箇年間天下之治乱諸

侯之盛衰より世之奇事迄も日次に書記して十

二巻となし元寛日記前篇と号す次て寛永九年

十二月より正保四年丁亥六月に終り十六ヶ年

間之事を記し寛正日記後編と号し都合廿三冊
となしぬと端書に載たり

一 寛明日記 写 三十冊

此編も寛永元年正月より明暦三年十二月まで
三十四箇年間の記事にして書中天草一揆之始
末を一冊となしぬ其事實の明瞭なる他本の類
ひにあらず兼文曰玉露叢元寛日記此書を始め
總而徳川氏之記にして朝廷之事は更なり公卿
殿上人之沙汰は少しも書せず史之大闕と云ふ
べきなり

(第壹號)

一 承寛日記 写 十冊

此編は徳川中執政中之記事にして朝廷之事は
概して録せず年分は如左

卷一 自承應元年 至天和二年

卷二 自天和三年 至元禄十七年

卷三 自宝永元年 至同正徳元年七月

卷四 自同正徳元年七月 至同享保六年

卷五 自享保元年八月 至同享保八年

卷六 自同享保八年 至同享保十四年

卷七 自同享保九年 至同享保十八年

卷八 自同享保十年 至同享保二十四年

卷九 自同享保十三年 至同享保二十四年

卷十 自同享保二十四年 至同享保二十四年

一 享保通鑑 写 廿一冊

此書は徳川氏執政中有名之賢君吉宗將軍之治

世享保十七年間之紀事令條及江城中之事評定
 所御沙汰書を日次に集録す禁中之沙汰は更に
 載せし此余徳川氏之記録は總て朝廷之儀式公
 事は云迄もなく朝臣之賢愚を始め何事も記す
 いるなり

卷一	自享保元年七月	卷二	自同二年八月
至同二年七月	至同三年八月	至同三年八月	至同三年八月
卷三	自同四年正月	卷四	自同六年正月
至同五年十二月	至同七年七月	至同七年七月	至同七年七月
卷五	自同七年七月	卷六	自同七年六月
至同七年七月	至同七年六月	至同七年六月	至同七年六月
卷七	自同九年七月	卷八	自同八年正月
至同九年七月	至同八年正月	至同八年正月	至同八年正月
卷九	自同十年正月	卷十	自同十年正月
至同十年正月	至同十年正月	至同十年正月	至同十年正月

(第壹號)

卷十一	自同十二年正月	卷十二	自同五年五月
至同十二年正月	至同五年五月	至同五年五月	至同五年五月
卷十三	自同九年八月	卷十四	自同十三年三月
至同九年八月	至同十三年三月	至同十三年三月	至同十三年三月
卷十五	自同四年五月	卷十六	自同四年五月
至同四年五月	至同四年五月	至同四年五月	至同四年五月
卷十七	自同九年六月	卷十八	自同十五年九月
至同九年六月	至同十五年九月	至同十五年九月	至同十五年九月
卷十九	自同十六年三月	卷廿	自同四年四月
至同十六年三月	至同四年四月	至同四年四月	至同四年四月
卷廿一	自同十七年正月		
至同十七年正月			

編中享保八年三月之條は左之一事有之他本不
 載ゆ名今此に援抄す
 當三月十八日柿本人麿千年忌に句二月朔日
 禁裏より石見國津和野城主亀井雋岐守播州明

石城主松平佐兵衛督右西人京都之家来江宣命
 位記等御渡被下右之品には石見國高津山杵本
 社へ納申候女房之文は播州明石之社へ納り候
 由法皇御所よりは御法樂の御歌被遣由也但し
 人九石見國陽岐守領分杵本と云所出生にて此
 處にて卒去すと此所に社有之又播州明石へ人
 九配流之事有之此所にも廟所有之又云々右杵本播州明石
 は濱田領堺也此所に杵本多有之梯之形大文字
 之筆之形也と云々二月朔日正一位梯本大明神
 神階宣下上卿中院大納言奉行葉室辨大内記清

(第壹號)

岡少納言西洞院中務大輔岡崎使吉田侍従其他
 地下官人等参上す云々
 一 大平記大全 四十一冊
 西道智撰
 此編首卷は目錄并鈔卷之注書也
 本文は大字にて題目一々記し其次段に抄評傳
 を細字に書すまゝ繪をも加えたり評は其得失
 を論す戦地之圖形を出し陣圖を製し其自己之
 戰略を述へ引抄するに圖經と云を用ゆ鈔には
 本文之注を下したる也傳記は人名之下に概譜

を擧ぐ然も菊池寂阿見嶋高德多治見園長長崎
 高資僧田觀文觀忠田賴意の如きも其世景を欠
 く總て系圖には疎く經說佛記に委し此書萬治
 二年仲夏の上梓にて圖画は考証に才へき品不
 少也
 一 太平記綱目 六十冊
 原文軒著
 寛文戊申仲夏洛下村田通信序
 是編太平記正文大書為綱以諸名家之評隲細書
 目

(第壹號)

紀年及紀月並載于各卷之初以便考覽以傳記及
 和田助則評為本以釋自晦評繼之凡雜抄如圖經
 合璧南木集滿祐記名和軍記等參考焉以上凡例之
 大意也本文四十卷之外序凡例目錄釵卷一冊第
 一卷之附翼君臣編冠服編邦域編三冊第十三ノ
 附翼遺諫篇一冊第十六附翼南木家訓一冊等以
 上六冊本書に増加して六十冊と為す君臣編は
 神武帝より正親所天皇天正癸酉に到るまで一
 百七代之君臣行事略是を記せり蓋し此書に引
 抄す書之中には偽撰之もの不少具眼の人よ

古書保字會

く識別あり

一 泰平年表

写

六冊

大野權之丞正利著

此編は自天文十一年十二月至天保八年四月徳川將軍十二代執政中之大要冠婚喪祭宮殿の文事憲法之類外國之來聘通商に至る迄を記す引書百五十一部を以て正利号忌之舎殿居袋青標紙等を著し天保九年六月十日九鬼式部少輔へ御預け被仰付以上著述之罪科と云幕府之世臣小十人組を勤仕す

(第壹號)

一 續泰平年表

写

四冊

竹之舎編輯四居堂校合

此編は天保八年四月より嘉永五年十二月に到り徳川家慶公治世中之紀事なり

Blank red-lined page for writing.

Blank red-lined page for writing.

